

ケース・スタディの2つのテンプレート¹ —Eisenhardt (1989) と Gioia, Corley and Hamilton (2012) の比較検討—

土屋 佑介[†]、辺見 英貴^{††}

Two Templates of Case Studies: Comparing Eisenhardt (1989) and Gioia, Corley and Hamilton (2012)

TSUCHIYA Yusuke, HEMMI Hidetaka

目 次

1. はじめに	2
2. Eisenhardt (1989) と Gioia et al. (2012) との比較検討	3
2-1. 認識論上の前提と研究の志向性	3
2-2. 文献調査と先行研究の必要性	3
2-3. データの収集	4
2-4. データの分析	5
2-5. 記述方法	7
3. おわりに	10
3-1. 貢献	10
3-2. 今後の課題	10

Abstract

The purpose of this research is to clarify the Gioia Methodology (Gioia, Corley, & Hamilton, 2012), which has attracted attention as a qualitative method. Through a comparative analysis with the Eisenhardt (1989) template, we divided it into five items: epistemological foundations and research orientation, the need for prior research, data collection, logic of the analysis, and rhetoric of the writing. As a result, we proposed a taxonomy that organized the commonalities and differences between the two templates, and introduced a method to increase the rigor of case

[†] 大阪産業大学経営学部経営学科講師

^{††} 神戸大学大学院経営学研究科博士課程後期課程

草稿提出日 3月13日

最終原稿提出日 3月18日

¹ 本研究は、Gioia, Corley, and Hamilton (2012) の整理検討を土屋と辺見が行なったものである。当該論文の忠実な要約ではないのでご注意いただきたい。したがって、本研究を引用することがある場合には、「土屋・辺見 (2020) によれば、Gioia et al. (2012) は…」あるいは「Gioia et al. (2012) は、… (土屋・辺見, 2020)。」のように明記されることを推奨する。

studies. Finally, we discussed three limitations in Gioia et al. (2012).

キーワード：ケース・スタディ、テンプレート、質的研究方法、比較検討

Key words：Case Studies, Template, Qualitative Method, Comparative Analysis

1. はじめに

本研究の目的は、米国系雑誌を中心とした質的研究で注目されている Gioia Methodology と呼ばれる Gioia, Corley, and Hamilton (2012) の主張を整理し、彼らの方法論の位置づけとそのあり方を検討することである。その際に、Glaser and Strauss (1967) と Yin (1984) を踏まえた Eisenhardt (1989) と比較しながら検討し、2つのテンプレートの共通点と相違点を押さえ論旨を整理する²。

本研究の背景には、質的研究で必須の記載事項や前提となる認識論の違い、および文献やデータの収集・分析・記述に関して、日本国内の研究者間で共通理解がないことが挙げられる。例えば、2011年に組織科学誌の「経営組織の分厚い記述」特集では、当該誌の自由論題への年間投稿総数に匹敵する論文38本が投稿された。このことは、日本の経営学研究で質的方法が注目されていることの証左なのだが、同時に巻頭言では、投稿論文の調査方法や対象者数、期間やデータ概要に関する記述不足が散見されたことに苦言も呈されていた(2頁)。また、同じく組織科学誌が2019年に特集した「質の高い研究論文とは？」では、「日本の経営学コミュニティには、国際標準に合った研究論文を量産する十分な能力が蓄積されているとはいえず」(2頁)という指摘もあった。

もちろん、多くの研究が利用するテンプレートを紹介することで、研究者が自身の研究を正当化するために、印籠のごとく使用する動機づけを生む危険性もある(横澤・辺・向井, 2013, 42-43頁)。しかしながら、Gioia Methodology に関する研究ノートをまとめることには、日本国内の研究者に対する論文の紹介とケース・スタディの厳密性を高める方法の整理が可能な点で意義があるといえる。

² なお、Eisenhardt (1989) の整理検討に関しては佐藤 (2009)、Glaser and Strauss (1967) と Yin (1984) と Eisenhardt (1989) の比較検討に関しては横澤・辺・向井 (2013) が丁寧にレビューしているため、あわせて参照されたい。

2. Eisenhardt (1989) と Gioia et al. (2012) との比較検討

本節では、Eisenhardt (1989) と Gioia et al. (2012) を5つの項目に分けて、それぞれ言及していく形をとる。そのために本研究は、5つの項目を用意した。認識論上の前提と研究の志向性 (2-1.)、文献調査と先行研究の必要性 (2-2.)、データの収集 (2-3.)、データの分析 (2-4.)、そして、記述方法 (2-5.) である。最後に5つの項目をまとめたタクソノミーを提示する。

2-1. 認識論上の前提と研究の志向性

まず Eisenhardt (1989) は、論理実証主義の前提に立っており、彼女自身も明確に「実証主義者」だと示している。つまり、知識は人々とは独立して客観的に存在する真実だということである。より正確に言えば、知識は追試可能かつ常に反証される対象であり、反証されるまでは持ちこたえているという意味で、暫定的な知識である。したがって、ケース・スタディを通じて生み出された知識 (理論や仮説) は、別のサンプルや更なる経験的調査を基に検証され、新たな理論や仮説として修正されていくことが必要となる。

一方で、Gioia et al. (2012) は、社会構成主義の前提に立つ。彼らの指摘にならえば、「組織の現実を構築する人々は (信念や考え方、言説等の) 『知識を生み出すエージェント』 (knowledgeable agent)」である (p. 17; 括弧内は筆者らによる加筆)。つまり、知識は人々とは独立して客観的に存在する事実ではなく、人々の何らかの活動の結果、作り上げられた産物だということである。したがって、ケース・スタディを通じて生み出されるのは、調査対象者に密着した言い回し (adhere faithfully to informant terms) を用いつつ、理論領域にも引きつけた (theoretical realm) 斬新なコンセプトやプロセス・モデルといった命題となる (p. 21)³。

2-2. 文献調査と先行研究の必要性

Eisenhardt (1989) がケース・スタディを行う上で、最初に行なう必要があることは、調査に必要な概念を特定するための先行研究レビューである。これを行なうことなしに、研究課題を設定できない。あらかじめ研究課題を定義しておくことは、調査の際に「どのような組織を対象にすればよいか」、あるいは「どのようなデータを集めればよいか」を特定することにつながる。焦点を決めることなく調査を始めると、データの海で溺れることに

³ 実証主義と解釈主義 (本研究でいう社会構成主義を含む) の違いに関しては、例えば、野村 (2017, 15-24頁) の説明がわかりやすいので、あわせて参照されたい。

なってしまうからだ。

同様に、事前に構成概念を明確にしておくことも理論構築型の研究をする上で役に立つ。理論構築型の研究では、これをすることによって、構成概念をより正確に測定することができるようになるからだ。ただし、研究を進めていく中で、変更される可能性があるため、あくまでも、それらは仮のものであることも認識していなければならない。

さらに、ケース・スタディを始めるにあたって、バイアスを避けるために特定の理論や仮説に依拠しない状況で始めるのがよいという。つまり、既存研究などを参考にして研究課題とする点や重要そうな変数は明確にしておくが、特定の変数と理論の関係までは明確にしないということである。

同様に Gioia et al. (2012) は、「ここで少し告白をする (A small confession here)」(p. 22) とした上で、研究がデータ分析の段階に至るまでは、詳細まで文献を知らないでおく必要があると主張する。なぜなら、あまりにも早くから文献を詳細に知ることによって、研究者がデータに対して盲目になり、先行仮説のバイアス（確証バイアス）を導いてしまうからだという。もちろん Gioia らは、決して完全に既存研究について知るべきではないと言っているわけではない。Gioia らは、研究者がこうしたスタンスをとることによってはじめて、思い込みの回避、もしくは、関心領域における既存の理論化されたものを無視できると指摘しているのである⁴。

2-3. データの収集

まず Eisenhardt (1989) と Gioia et al. (2012) の共通点を2点言及する。1点目は、調査中にデータ収集方法やインタビュー・プロトコルを随時変更可能とする点である。ただし、調査が行き当たりばったりでよいというわけではない。特に Eisenhardt は、生み出される理論をより良くするために、特定ケースの特殊性を生かし、新事実を発見しやすくするために、調査の柔軟性が必要だとする。

もう1点目は、複数の研究者による調査を推奨している点である。複数の研究者による調査の利点について、Eisenhardt は2点挙げている。第1に、研究の創造力を高める点である。研究者はお互いの洞察力を補完しあい、データに埋もれている未知の事実を文章化する可能性を高めることができるからである。第2に、分析結果の信頼性と客観性を高め

⁴ 先行研究が存在しないことを理由に文献調査を行なわない論文も散見されるが、「現場に根付いた理論の発見をめざすから、関連する理論研究であっても先行研究の概念は一切使用しないというのも極端であるし、それは研究上の怠慢の正当化にもつながる。エスノグラフィー等で、理論なき未知の領域を実証的に探索するひとは、多くの場合、実に多種多様な公式の理論を知悉している」(金井, 1994, 第3章, 注28, 144-145頁)。したがって、文献調査を行なわない質的研究は存在しないのだ。

る点である。この点を高めるにあたっては Gioia et al. (2012, p. 19) も指摘しているが、フィールドに入り込んで現地人化する (going native) 研究者の問題がある。その対策として、両研究者とも調査対象に行く研究者と行かない研究者に分けて研究を行なうことを挙げている。これによって、現場に行かない研究者は、調査対象者や調査対象の詳細な情報を知らないため、フィールドに入り込んだ研究者の発見事実に対して、別の視点から考察を行うことができ、その結果、信頼性と客観性が高まるとしている。

逆に Eisenhardt (1989) と Gioia et al. (2012) とで異なる点は、ケースの選択の仕方である。この違いは「2-1. 認識論上の前提と研究の志向性」に由来する。Eisenhardt (1989) におけるケースの位置づけは、理論構築のために意図的に、データから出現した理論を発展させ、前のケースを再現するように選ばれる。したがって、他の特徴が類似する一方で、1つの重要な特徴が大きく異なる複数のケース (4~10) を理論的な理由から選択する。これを理論的サンプリングという。

一方で、Gioia et al. (2012) は、既存研究を覆すような可能性と豊富なデータが得られそうかに基づいて単一のケースを選択する。このような姿勢は、彼らが依拠するグラウンデッド・セオリー (grounded theory) がもつ「方法論的要請」(好井, 2006; 193-194頁) と理解するのがよいだろう。社会学者である好井は、グラウンデッド・セオリーが「グラウンデッドという言葉に象徴されているように、それは、人々が生きている現実に基づけられ、あるいは根をおろし、そこから決して乖離することなく、現実で生きられている規範や秩序などを取り出し、読み解いていくアプローチである」と指摘している (好井, 2006; 193-194頁)。したがって Gioia らのスタンスは、研究者がデータや調べている現実と同じ場所に居続けようとできるだけ努力をすべきだという要請に基づいていると理解できるのだ。

2-4. データの分析

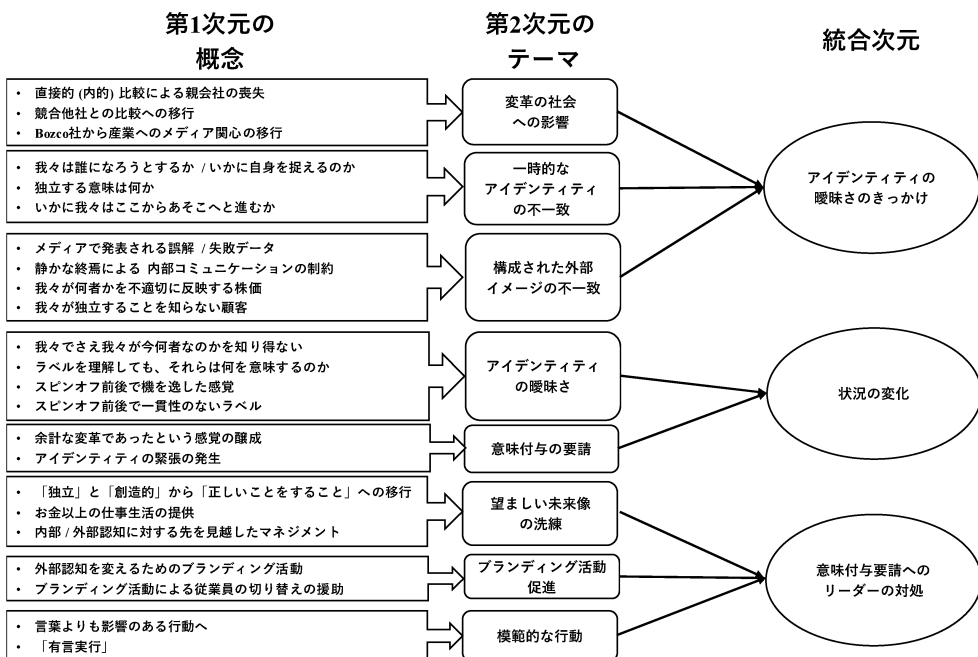
質的研究の場合、インタビュー、観察、資料など複数の方法を組み合わせることが一般的である。Eisenhardt (1989) が興味深いところは、質的・量的データを問わず使用可能だとする点である。彼女はこのいくつかのメリットとして、データを組み合わせることによる相乗効果や分析結果を補強できることを挙げている。例えば、量的データによって、質的データで得た研究者が鮮明な情報に惑わされ、誤った印象を持ってしまうバイアスを避けられる一方で、質的データによって、量的データの中で出現した論理的根拠や理論の背後にある関係を理解するのに役に立つのである。

また Eisenhardt は、データの分析に際して、ケース内、ケース間、データ・ソース間

の継続的比較が重要であるとする。これは、人間の情報処理能力の限界に伴うバイアスと誤った解釈を導かないための方策である。そして彼女は、比較を通じて浮上した特徴について、高いケースと低いケースとを分けて分析を行なうことが次に重要であるとする。これは例えば、ある特徴が2つ浮上すれば、高低で2×2のマトリックスを構成することができ、分析を進めやすくなるからである。

一方で Gioia et al. (2012) は、Glaser and Strauss (1967) によるグラウンデッド・セオリーに依拠して、3段階の段階的な抽象化によるデータ構造づくりを行なう (図表1)。まず、第1次元であるコンセプトは、Glaser and Strauss (1967) のオープン・コーディングと同様に、収集された生データを文章ごとに細かく分断 (切片化) した後、内容を適切に表現する簡潔なラベルを付ける作業である。ただし、この段階では、まだ先行研究を参照せず、生データと向き合うようにする。続く第2次元のテーマは、同じく Glaser and Strauss (1967) のアクシャル・コーディングと同様に、類似するラベル同士をまとめ、カテゴリー分けを行う。ここで初めて先行研究を参照しながら、コンセプトを包含するようなテーマの生成を行なっていく。最後の統合次元は、これ以上抽象的にならないという理論的飽和に至るような次元の生成を行なっていく。なお分析の際には、複数の研究者が内部者と外部者の役割に分かれ、データ解釈の共通理解をするに至ることが求められている。このよ

図表1. Corley and Gioia (2004) で用いられたデータ構造



出所) Gioia et al. (2012, p. 21) をもとに筆者作成

うな分析を経て完成するのが、図表1である。

しかしながら、この図表1を示すだけでは、コンセプト・テーマ・統合次元同士の関係について何も説明したことになる。そこで Gioia らは、データ構造からグラウンデッド・セオリーに移行するには、それぞれの関係を説明する必要があることを指摘している。

2-5. 記述方法

Eisenhardt (1989) はケースの記述について3点言及している。1点目は、既存研究との違いを示しつつ、分析結果が斬新な知見をもたらしているかを記述することである。理論構築のためのケース・スタディは、単に既存の理論の追試に終わってはならない。この方法による理論構築の強みは、生み出された理論が新規性、検証可能性、実証的妥当性を持つ可能性があることだと Eisenhardt は述べている。

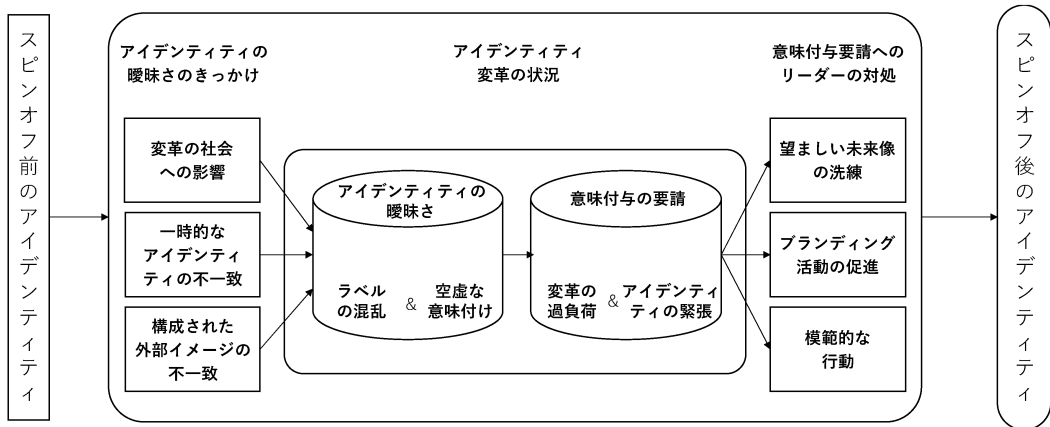
加えて、示されたそれぞれの命題が、データと文献に基づいて構築されたことに関する説明を丁寧に記述する必要がある。これが2点目である。サンプルやデータ収集手順、分析に関する情報を示す必要があるのはもちろんのことである。それ以上に彼女が重要視しているのは、再現性のある研究に必要な方法を行っているかということである。具体的に言えば、データが理論を裏づけているか、慎重に分析手順を踏んだか、証拠は理論を支持するものか、対抗する説明を棄却できたかといったことである。繰り返しになるが、こうした再現性のある研究を重要視する背景には、生み出された理論や仮説は、追試可能かつ常に反証される対象であるという論理実証主義がある。

3点目は、データの深みを出すために、データの一覧および、高いケースと低いケースに関する発言例という、2つを証拠として提示することである。Eisenhardt (1989) によれば、データの一覧を見せることにとどまってしまうケース・スタディが多く、読者の理解を鑑みていないという。つまり、この2つの両極端なケースを示すことは、読者を意識して行われる記述であり、この分析から浮かび上がった特徴をクリアに示すことができる意味で重要なのである。

一方で、Gioia et al. (2012) は、次の3点について言及している。1点目は、驚くべき調査における発見事実を引用しつつ、既存研究を覆すことができることを示すことである。もちろん、Eisenhardt (1989) が重要視する再現性のある研究に必要な事項も簡単に触れられている (p. 23; Appendix A) が、彼らが目指しているのは、既存研究の相対化なのである。

2点目は、データ構造におけるコンセプト、テーマ、次元同士の関係を因果関係の矢印(→)で示すことが肝心であると指摘する(図表2)。このように矢印(→)で因果関係を

図表2. Corley and Gioia (2004) で示された組織アイデンティティの変化プロセス



出所) Gioia et al. (2012, p. 23) をもとに筆者作成

示すことで、因果関係でつなげられたダイナミックなプロセスを描くことが可能になるのである⁵。

3点目は、データ構造のうち、テーマと次元において新奇性の高い命題は強調して示すということである。なお、命題を強調するにあたって Gioia et al. (2012, p. 25) は、次の2点を問いかける必要があると指摘している。第1に、命題が未来の質的研究者にとっての見取り図となりうるか、ということであり、第2に、命題が質的研究と量的研究の深い溝をつなぐ橋として有効となりうるか、ということである。以上、5つの項目をまとめたのが、図表3である。

Eisenhardt (1989) は、「検証可能な理論の産出」を目的としており、そのことにケース・スタディの魅力の1つを見出すことができる。しかし、佐藤 (2009) が指摘するように、このことがかえって、ケース研究のもう1つの魅力である「複数の主体の意図が交錯するような複雑な社会現象を説明するメカニズムを明らかにする」という魅力を半減させてしまった (684-685頁)。つまり、Eisenhardt は質的研究が量的研究に従属する関係にあると理解している。

一方で Gioia et al. (2012) は、質的研究は自立した (stand on its own) 研究方法であると指摘している (p. 25)。彼らは、質的研究で生み出される理論を斬新なコンセプトやプロセス・モデルとすることで、質的研究と量的研究の関係を独立する関係にあると理解し

⁵ 因果関係を矢印で示すことについては、田村 (2006, 172-188頁) の過程追跡の説明がわかりやすいので、あわせて参照されたい。

図表3. Eisenhardt (1989) と Gioia et al. (2012) のタクソノミー

	Eisenhardt (1989)	Gioia et al. (2012)
認識論上の前提	●論理実証主義	●社会構成主義
研究の志向性 (2-1)	●検証可能な理論の構築 (法則而立的な理論を構築することで、 一般化するための仮説の提示)	●調査対象者の意味世界の捕捉とモデル化 (斬新なコンセプトやプロセス・モデルなど の命題の提示)
文献調査と 先行研究の 必要性 (2-2)	●調査に必要な概念を特定するために、 関連分野の文献を調査する ●研究課題と概念のリストを作成するが、 概念同士の関係を考えるのは避ける	●データの海に溺れることを防ぐために、 関連文献を調査する ●理論負荷は不可避だが、確証バイアスの 回避にあたって特定文献に依拠しすぎない
データの収集 (2-3)	●他の特徴が類似する一方で、1つの重要な 特徴が大きく異なる複数のケース (4~10) を選ぶ (理論的サンプリング) ●調査中にデータ収集方法やインタビュー・ プロトコルを随時変更する ●複数の研究者で調査を行う	●既存の考えを覆すような可能性と豊富な データが得られそうかに基づいて (1つの) ケースを選ぶ ●調査中にデータ収集方法やインタビュー・ プロトコルを随時変更する ●複数の研究者で調査を行う
データの分析 (2-4)	●複数の情報源とデータのトライアン ギュレーションを基に妥当性と信頼性を 担保する ●ケース内・ケース間を比較し、仮説的な テーマ、コンセプト、変数を抽出する ●仮説的なテーマ、コンセプト、変数を基に ケース全体に共通する枠組みを示す	●複数の研究者を内部者と外部者の役割に 分け、彼らのチェックとトライアン ギュレーションを基に信頼性を担保する ●コンセプト、テーマ、次元という段階的な 抽象化を通じて、データ構造を作る ●データ構造におけるコンセプト、テーマ、 次元同士の因果関係を考える
記述方法 (2-5)	●既存研究との違いを示し、分析結果が 斬新であることを示す ●データの一覧および、高いケースと 低いケースに関する発言例という、 2段階を証拠として提示する ●各命題が、データと文献に基づいて 生み出されたことを示す	●驚くべき調査における発見を引用しつつ、 既存研究を覆すことができることを示す ●データ構造におけるコンセプト、テーマ、 次元同士の関係を因果関係の矢印で表し、 モデルにして示す ●データ構造のうち、テーマと次元を基に した新奇性の高い命題は強調して示す

出所) 筆者作成

ているのだ⁶。このことはひるがえって、Eisenhardt (1989) が「検証可能な理論の産出」を目的としたことで半減してしまったケース・スタディの魅力回復することにもつながるといえよう。

⁶ 実証主義と非実証主義（社会構成主義を含む）のどちらかに立脚するか、ケース選択の論理が異なることに関しては、野村（2017, 54-60頁）の説明がわかりやすいので、あわせて参照されたい。

3. おわりに

3-1. 貢献

本研究の目的は、主に米国を中心とした質的研究で注目されている Gioia Methodology と呼ばれる Gioia et al (2012) を整理し、彼らの方法論の位置づけとそのあり方を検討することであった。本研究の貢献は2点挙げられる。

第1に、2つのテンプレートの共通点や相違点を押さえたタクソミーを作成した上で、論文の整理を行なった点である。少なくとも2020年3月1日時点で、Google Scholar で Gioia et al. (2012) を引用した日本語論文はヒットしなかった。つまり、米国を中心とした質的研究について、日本国内誌では未だに参照されていない可能性があるといえる。そのため今後、日本国内の研究者が Gioia et al. (2012) を参考にする際の1つの見取り図を提示した点に貢献があるといえる。

第2に、ケース・スタディの厳密性を高める方法を紹介した点である。冒頭で述べたように、近年では国際標準に合う研究論文が必要とされているにもかかわらず、その能力の蓄積がないことが指摘されていた。そこで本研究は、「質の高い『質的』研究」を行なうにあたって Gioia Methodology という1つのテンプレートを紹介することで、今後、日本国内誌の質的研究の質の向上に寄与できると考えている。

3-2. 今後の課題

最後に、この比較検討だけでは検討できなかった3点を今後の課題として挙げる。1点目は、研究者がフィールドにおいてどのようなポジションにいるかに関する言及がない点である。具体的には、いかに調査対象者へとアクセスするか、研究者が調査対象者と接する際にどの程度自分自身について語るのかに関する言及がない点を問題視したい。

実際、Gioia et al. (2012) には、かつて Gioia が調査を行なった際に起きた失敗の告白がある。

「君たち！この研究結果は我が社のことについて全然わかっていない。君たちは大部分の重要な意思決定を行なう経営幹部層 (kitchen cabinet) があることを知らないのかい？君たちはその会議への参加を依頼できていないようだから、重要なスタッフを見落としているし、この分析は君たちの無知をさらけ出しているのだよ。」

(Gioia et al., 2012, p. 20；翻訳は筆者ら)

この経営幹部の指摘を受けた Gioia は、「目を見開いた思い (An eye-opener)」(p. 20) をした後、経営幹部層の集まりに参加し、再度、分析結果を書き直すことになった。彼らのこの引用はあくまでも、研究者が柔軟な姿勢をとる重要性を示す一例として用いられている。

しかしこの引用を、研究者のフィールドにおけるポジションの変化と捉えることはできないだろうか。そもそも調査におけるインタビューや参与観察は、単なる研究上の手続きではなく、研究者が調査先においてあるポジションを得て、そこでの人々や場所、実践にアクセスできるときに、それに伴って変化していく政治的なものである。

例えば、ソーヤー (2011) は、状況的学習論 (e.g., Lave & Wenger, 1991) の観点から、研究者が特権的にあらゆるものを観察したり、あらゆることにアクセスできたりする存在ではなく、研究対象として実践のコミュニティへ参加しようとしている存在であると見なすことができると指摘する。実際、調査を行なうためには、研究者自身も様々な方法で、その対象にアクセスしなくてはならない。そしてその際には、「どのような研究手法を取ろうとエスノグラファーがいかに実践にアクセス可能か、という問題から逃れることはできない」のである (ソーヤー, 2011, 77頁)。

このように考えるなら、ある調査対象に関して厚い記述ができるかどうかは、研究者の実践へのコミュニティへのアクセス可能性に依存しているということになるだろう。そして、アクセスの容易さや困難さは、単に調査がうまくいったかどうかということだけではなく、そのコミュニティにおける研究者のポジションやそのコミュニティの開放性や閉鎖性を示していると考えられる。

例えば、山田 (2011) は、宮崎県にある2つの精神病院 (一ツ瀬病院と A 県立病院) で行ったフィールド調査を、山田自身のフィールドへのアクセスのあり方を比較している。具体的には、前者においては、山田自身が院長より「公式に調査を依頼された大学の先生」として、一方後者においては、山田自身が「精神病患者」としてアクセスしている。この2つの調査を比較することによって、山田 (2011) は、調査対象へのアクセスの仕方によって、全く異なったフィールドでのリアリティが見出されることを示している。

したがって、調査対象で得たデータは、主観的な解釈でも客観的な記述でもなく、こうした諸関係の中で構築されるものだと考える必要が出てくる。従来のフィールドワークの方法論の多くの文献では、研究手法はあくまで研究手法であり、フィールドへの入り方も、あくまで、手法の一部として見なされてきた。この方法論の背景には、客観主義的な認識論がある。しかし、状況論的なアプローチを取るとき、フィールドワークの方法論は実践への参加やアクセスと切り離すことができないものであり、またフィールドで得たデータ

も、そうした自らを含む諸関係の構築のあり方の中で理解されるべきものになるだろう。この点に関しては、さらなる検討が必要である。

2点目は、Gioia et al. (2012) が依拠するグラウンデッド・セオリーが抱える理論構築の方法にある。彼らは分析について、その過程で帰納的なものからアブダクティブ (abductive) なものへと移行していくことに言及している (p. 21)。しかし、ここでいうアブダクティブとは一体どのようなものなのかに関する説明が不足しており、どういうことを指すのかについて理解に苦しむ。

また、当のグラウンデッド・セオリーも読者を困惑させる相反するアドバイスがなされているという指摘がある (Timmermans & Tavory, 2012, pp. 169-170)。具体的にいえば、研究者は新しい理論を生み出すために、既存研究に依拠しないように戒められる一方で、彼らは新しい理論を生み出すために、広く知れ渡った既存研究を基にした理論的感受性も求め続けているのだ (Timmermans & Tavory, 2012, p. 170)。これは一体、なぜ生じてしまったのだろうか。

まず Glaser and Strauss (1967) に目を通すと気がつくのは、彼らが繰り返し、研究者に早い段階で既存研究に入れ込み惑わされないように警告していることだ。例えば「研究対象となる領域に関わる理論と事実に触れた文献を、最初のうちは文字通り無視すること—これこそが効果的な一つの戦略なのである」と明言している (Glaser & Strauss, 1967, p. 37; 邦訳, 51頁)。また後段でも「研究者自身がある特定のあらかじめ用意された1つの理論に研究者が入れ込んでしまうと、創造性が失われる」という強い警告をしている (Glaser & Strauss, 1967, p. 46; 邦訳, 66頁)。

しかし、彼らが提唱する理論構築の帰納的方法 (いわゆるグラウンデッド・セオリー・アプローチ) を説明の中で、結果的に研究者に矛盾した要求を課すことになってしまう。Glaser と Strauss が提案する「絶えざる比較法 (constant comparative method)」(Glaser & Strauss, 1967, p. 91; 邦訳, 129頁) において重要な理論的サンプリング (特に、何を比較集団とするのか) の基本となるのは、浮上しつつあるカテゴリーの発展を促進する理論的関連性 (theoretical relevance) があることだ (Glaser & Strauss, 1967, p. 49; 邦訳, 69-70頁)。なぜなら、領域密着理論であっても、それがどのように理論的に重要性があるのかは、理論と関連付けなければ意味をなさないからである。そのため、非常に抽象的な理論と数多くの重要性の乏しい特定領域に密着した研究との間をつなぐマートンの言うところの「中範囲の理論」を生み出すためにグラウンデッド・セオリーの方法論の開発を熱望したのだ (Glaser & Strauss, 1967, p. 97; 邦訳, 139頁)。

同時に、Glaser と Strauss は、研究者が備える必要のある理論的な洞察に関する特性と

して、理論的感受性 (theoretical sensitivity) の必要性和明記している。理論的感受性とは「自己の研究領域を理論的に洞察できる能力」であり、領域に密着したレベルと抽象的なレベルで構成されるカテゴリーと仮説からなる理論装備 (armamentarium) である (Glaser & Strauss, 1967, p. 46; 邦訳, 65頁)。

すなわち、研究者は新しい理論を生み出すために、既存研究に依拠しないように戒められる一方で、彼らは新しい理論を生み出すために、広く知れ渡った既存研究を基にした理論的感受性も求め続けているのだ (Timmermans & Tavory, 2012, p. 170)⁷。

それでは、このグラウンデッド・セオリーの問題はいかに克服できるだろうか。この点については、演繹法と帰納法とは異なる推論形式であるアブダクション (abduction) に注目するという議論が近年行われている (Timmermans & Tavory, 2012, p. 170)。この点に関する検討は本研究の紙幅を超えるため、今後の課題としたい。

最後の3点目として、7頁にまとめたタクソノミーにおいて、社会構成主義がトライアンギュレーションによって信頼性を担保する必要性を上げたい。社会構成主義は、知識が人々とは独立して客観的に存在する事実ではなく、人々の何らかの活動の結果、作り上げられた産物と理解する立場を指すことは認識論上の前提と研究の志向性 (2-1.) で述べた通りである。

しかしながら、トライアンギュレーションによって信頼性を担保することができると主張する Gioia et al. (2012) は、様々な方法を用いれば、(すでにそこにある) より確かな事実到達できることを前提にしていまいだろうか。この前提は、知識が人々とは独立して客観的に存在する事実ではないとする社会構成主義の立場と矛盾することになってしまう。この問題は、質的研究と量的研究の分析方法の対立にもつながるため、稿を改めて検討することにしていきたい。

謝辞

本論文の審査過程で匿名レフェリーの先生より貴重なコメントをいただいた。この場をお借りして、感謝申し上げたい。

⁷ そもそも Glaser と Strauss 自身も、理論構築の帰納的方法が抽象化の恣意的な過程を通じて、領域密着理論 (a substantive theory) か公式理論 (a formal theory) のいずれかに行き着くと述べていた。「分析者は、データにかなりみられる多様性を理論的に理解するために、概念的抽象度の点で、分析を進めている質的な資料よりも一般性のレベルが高い概念を使用せざるを得ない。(中略) また、もしある抽象的な社会的カテゴリーに関連した多くの研究から引き出された研究成果から始めれば、分析者は一つの概念的領域に関連したフォーマル理論で終わることになる」 (Glaser & Strauss, 1967, p. 115; 邦訳, 163頁)。

参考文献

- Corley, K. G., & Gioia, D. A. (2004). Identity ambiguity and change in the wake of a corporate spin-off. *Administrative Science Quarterly*, 49 (2), 1145-1177.
- Eisenhardt, K. M. (1989). Building theories from case-study research. *Academy of Management Review*, 14 (4), 532-550.
- Gioia, D. A., Corley, K. G., & Hamilton, A. L. (2012). Seeking Qualitative Rigor in Inductive Research Notes on the Gioia Methodology. *Organizational Research Methods*, 16 (1), 15-31.
- Glaser, B. G., & Strauss, A. L. (1967). *The discovery of grounded theory: Strategies for qualitative research*. New York, NY: Aldine. (後藤隆・大出春江・水野節夫訳『データ対話型理論の発見調査からいかに理論をうみだすか』新曜社, 2009年).
- 金井壽宏 (1994). 『企業者ネットワークの世界 ポストン近辺の企業者コミュニティの探求』白桃書房.
- Lave, J., & Wenger, E. (1991). *Situated Learning. Legitimate peripheral participation*. Cambridge, MA: Cambridge University Press. (佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加』産業図書, 1993年).
- 野村康 (2017). 『社会科学の考え方 認識論、リサーチ・デザイン、手法』名古屋大学出版会.
- 佐藤秀典 (2009). 「ケース・スタディの魅力はどこに? —経営学輪講 Eisenhardt (1989) —」『赤門マネジメント・レビュー』第8巻第11号, 675-686頁.
- ソーヤーりえこ (2011). 「社会的実践としての学習—状況的学習論概観—」(上野直樹・ソーヤーりえこ編『文化と状況的学習 実践、言語、人工物へのアクセスのデザイン』(40-88頁), 凡人社, 2011年).
- 田村正紀 (2006). 『リサーチ・デザイン 経営知識創造の基本技術』白桃書房.
- Timmermans, S., & Tavory, I. (2012). Theory construction in qualitative research: From grounded theory to abductive analysis. *Sociological Theory*, 30 (3), 167-186.
- 山田富秋 (2011). 「第二章 フィールドワークにおいて変容する自己」(山田富秋著『フィールドワークのアポリア』(38-62頁), せりか書房, 2011年).
- Yin, R. K. (1994). *Case study research: Design and methods* (2nd eds.) Newbury Park, CA: Sage (近藤公彦訳『ケース・スタディの方法 第2版』千倉書房, 1996年).
- 横澤公道・辺成祐・向井悠一郎 (2013). 「ケース・スタディ方法論: どのアプローチを選ぶか」『赤門マネジメント・レビュー』第12巻第1号, 41-68頁.
- 好井裕明 (2006). 『「あたりまえ」を疑う社会学 質的調査のセンス』光文社新書.